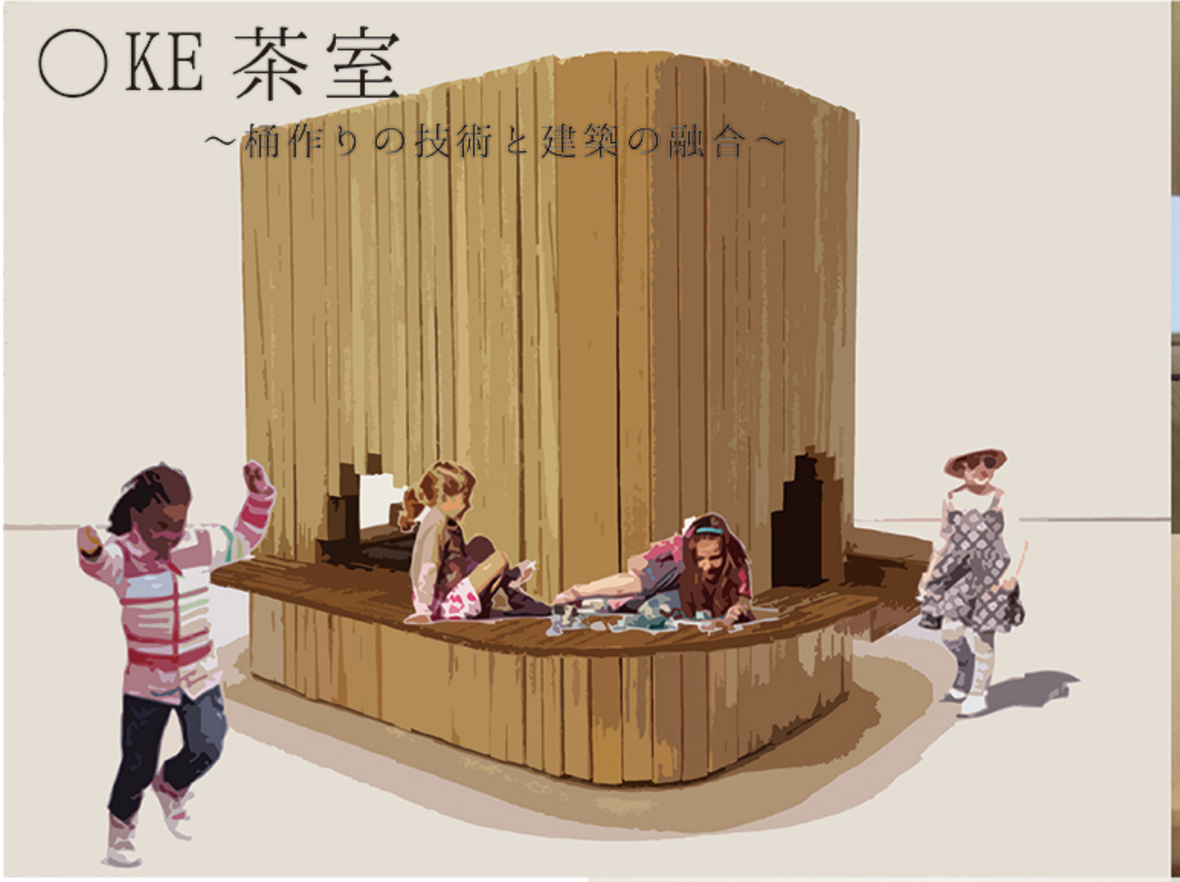
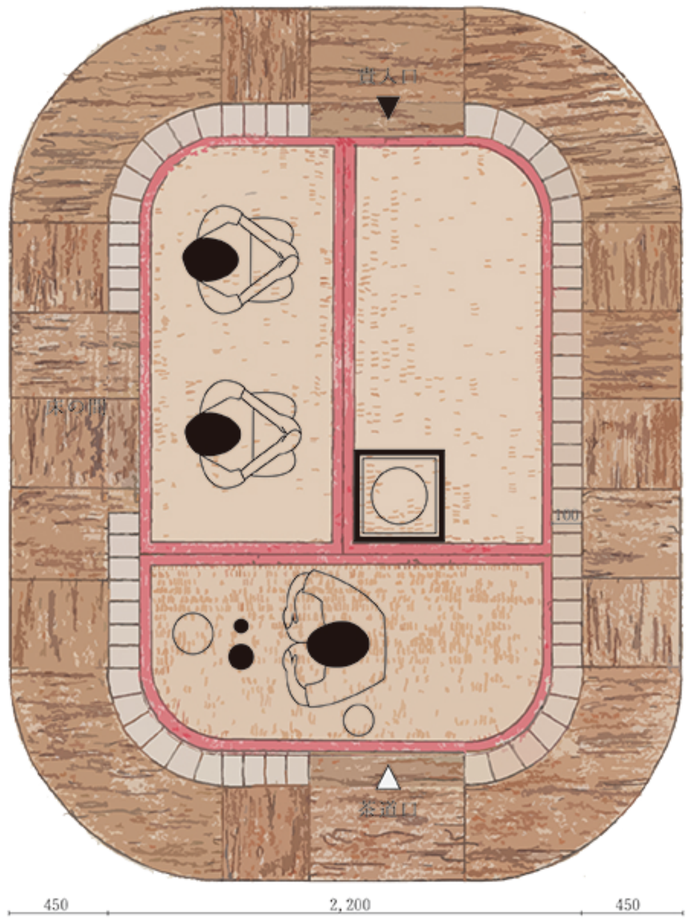
○KE 茶室

～桶作りの技術と建築の融合～



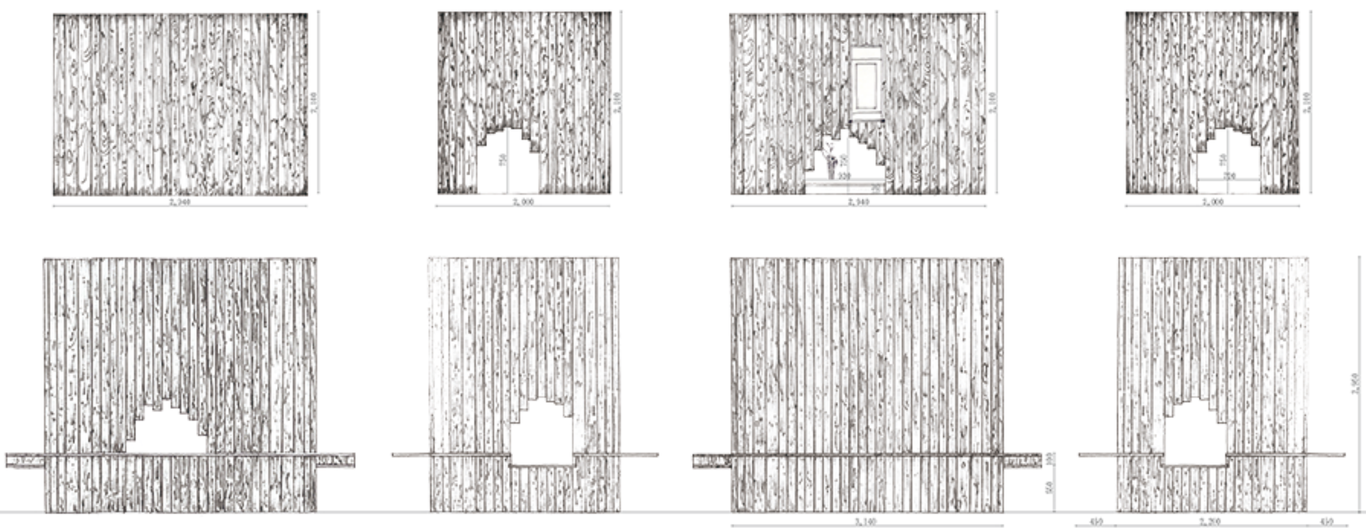


	床	壁	天井	建具
内部	畳敷き （95.5mm×191）	ヒノキ 100×150 角材	桧ヒノキ 羽目板 無節・上小 （10×73×1985mm）	——
外部	——	ヒノキ 100×150 角材	——	——

設計趣旨

子どもたちが駆け回る運動場の中に茶室はあります。

なめらかな木の表面と周りを囲う縁側は丸みを帯びており、安心感や優しさといった、あたたかな佇まいで子どもたちを向かい入れます。厚さ 10 センチの木の壁に包まれた内部は、薄暗く、外から守られているような穏和な空間です。その静かで涼とした中で子どもたちは茶の湯の精神を学び、自身を内観します。

全体のデザインと構造に無駄のない洗練された空間を目指し、たどり着いたのが日本の伝統的な桶作りの技術でした。職人さんの緻密で正確な「感覚」によって生み出されたシームレスな曲線は、建築への応用が可能であると考えました。これは、木の次世代建築の可能性を見出し、日本の伝統工芸を次の時代を担う子供たちに継承する役割も果たせるものと考えます。

縁側は、子どもたちを誘い、茶室の機能として床の間の役割も担います。外部空間に置かれた床の間は、閉ざされた茶室内に最小限の光と外部の季節感を取り入れます。
躙り口と茶道口、床の間の三箇所の開口部は、側板の長さを不揃いにすることでデザインされています。これは茶室が本来未完成であり、亭主の心遣いで彩られることで、初めて茶室としての完成を見るものとしての「余白」を表現したものです。